

# 第1講

## 助動詞(1)

### 「き」「けり」「し」「ぬ」「ず」「たり」「り」「なり」

#### 基本事項

き・けり (過去)の助動詞

〔接続〕活用語の連用形に接続する。「き」はカ変・サ変動詞の未然形にも接続する。

基本形	活用	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
き	特殊型	(せ)	○	き	し	しか	○
けり	ラ変型	(けら)	○	けり	ける	けれ	○

〔意味〕「き」 過去(〜タ) 直接体験(〜タ)

〔けり〕①過去(〜タ) 伝聞した過去(〜タソウダ)

②詠嘆(〜ダッタノダ、〜(タ)ナア)

つ・ぬ (完了・強意)の助動詞

〔接続〕活用語の連用形に接続する。

基本形	活用	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
つ	下二段型	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ぬ	ナ変型	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

〔意味〕①完了(〜シテシマッタ、〜タ)

②強意(キット〜、〜シテシマウ)

ず (打消)の助動詞

〔接続〕活用語の未然形に接続する。

基本形	活用	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	補助活用
ず	特殊型	ず	ず	ず	ぬ	ね	○	基本活用
		けら	けり	○	ざる	ざれ	ざれ	補助活用

#### フリスα

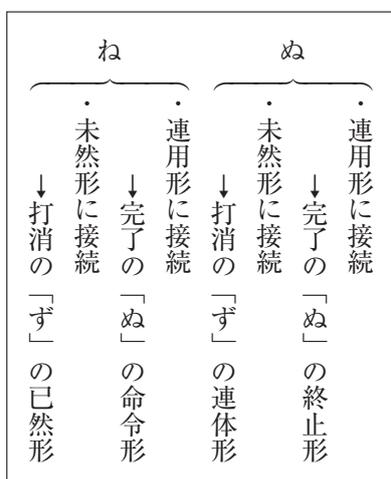
▽「き」は話し手(作者)が直接体験した過去を述べる場合に用いられ、「けり」は伝聞した過去の事実を述べる場合に用いられるが、例外的用例もある。

▽「けり」が詠嘆の意味で用いられるのは、和歌や会話文中であることが多い。

▽「つ」「ぬ」が強意を表す場合は、下に推量の助動詞が付くことが多い。

つ↓てむ・つべし・つらむ・てまし  
ぬ↓なむ・ぬべし・ぬらむ・なまし

▽「ぬ」「ね」は、完了の助動詞「ぬ」の場合と、打消の助動詞「ず」の場合がある。接続で識別する。



▽助動詞の補助活用は、主に下に助動詞が付くときに用いられる。

〔意味〕 打消（～ナイ）

たり・り 〈完了・存続〉の助動詞

〔接続〕 たり⇨活用語の連用形に接続する。

り ⇨四段動詞の已然形とサ変動詞の未然形に接続する。

（サ変・四段動詞の命令形に接続するという説もある。）

基本形	活用	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
たり	ラ変型	たら	たり	たり	たる	たれ	(たれ)
り	ラ変型	ら	り	り	る	れ	(れ)

〔意味〕 ①完了（～タ）

②存続（～テイル）

なり・たり 〈断定〉の助動詞

〔接続〕 なり⇨体言と活用語の連体形に接続する。

たり⇨体言のみに接続する。

基本形	活用	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
なり	形容詞型	なら	なり	なり	なる	なれ	(なれ)
たり	形容詞型	たら	たり	たり	たる	たれ	(たれ)

〔活用〕

①断定（～デアル）

②存在（～ニアル、～ニイル）（「なり」のみ）

※〈完了・存続〉の「たり」と〈断定〉の「たり」の識別

連用形 + たり ⇨ 〈完了・存続〉の「たり」

体言 + たり ⇨ 〈断定〉の「たり」

▽「たり・り」の完了と存続の意味の違い。

完了：何かが終わった状態を表す。

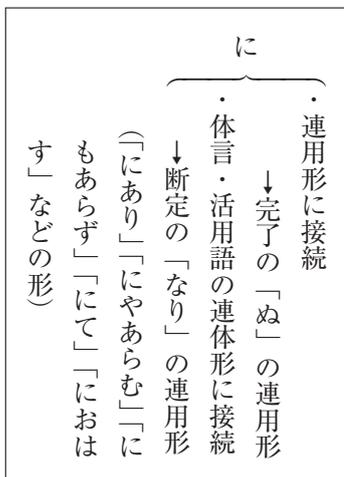
存続：ある状態が起こり、継続していることを表す。

とを表す。

完了と存続の意味の識別は、まず、存続の意味で確認してみるとよい。存続の「～テイル」を当てはめてみて、意味が通れば存続。それで通らなければ完了の意味を当てはめて確認する。

▽断定の助動詞「なり」は、助詞や副詞にも付く。

▽「に」は、完了の助動詞「ぬ」の場合と、断定の助動詞「なり」の場合がある。接続で識別する。



▽「に」は他に、形容動詞ナリ活用の連用形の活用語尾（静かに、あはれに、など）や、格助詞、接続助詞、副詞の一部（げに、など）がある。

1 次の( )の中の動詞を適切な形に活用させよ。

- (1) 花見に(行く)き。 (2) 花見に(行く)けり。 (3) 花見に(行く)つ。  
 (4) 花見に(行く)ぬ。 (5) 花見に(行く)ず。 (6) 花見に(行く)たり。  
 (7) 花見に(行く)り。 (8) 花見に(行く)なり。

2 次の( )の中の助動詞を適切な形に活用させよ。

- (1) 花見をせ(き)時 (2) 花見をし(けり)時 (3) 花見をし(つ)時 (4) 花見をし(ぬ)時  
 (5) 花見をせ(ず)時 (6) 花見をし(たり)時 (7) 花見をせ(り)時 (8) 花見をする(なり)時  
 (5) (1) (6) (2) (7) (3) (8) (4)

3 次の傍線部の「けれ」を文法的に説明せよ。(例 過去の助動詞「き」の終止形)

- (1) 桜の散りけるを見てこそ詠みけれ。  
 (2) あやしうこそものぐるほしけれ。

4 次の文中から打消の助動詞を抜き出し、活用形を答えよ。

- (1) 改めて益なきことは、改めぬをよしとするなり。  
 (2) などか宮仕へをしたまはざらむ。  
 (3) 飛鳥川にあらねば、淵瀬さらにかはらざりけり。

(3) (1)  
 形 形  
 (2)  
 形

1 助動詞の接続の問題。「行く」は力行四段動詞で、「行か・行き・行く・行く・行け・行け」と活用する。

2 助動詞の活用の問題。「時」は名詞Ⅱ体言なので連体形にすればよい。

3 助動詞か、活用語の一部かを見分ける。文末が決まった活用形となる「係り結び」をつくる「こそ」に注目する。

4 打消の助動詞「ず」は、連体形と已然形に注意する。また、下に助動詞が付く場合は、補助活用が使われる。

**5** 次の文中から完了の助動詞を抜き出し、活用形を答えよ。

- (1) かうこそ燃えけれど、心得つるなり。
- (2) 老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まほしき君かな
- (3) この男かいま見てけり。
- (4) 限りなく遠くも来にけるかな。
- (5) 舟子、かちとりは、舟唄うたひて何とも思へらず。
- (6) おほかたみな荒れたれば、あはれとぞ人々言ふ。
- (7) 道知れる人もなくて、まどひ行きけり。

(7)	(5)	(3)	(1)
_____	_____	_____	_____
.	.	.	.
形	形	形	形
	(6)	(4)	(2)
	_____	_____	_____
	.	.	.
	形	形	形

**6** 次の文中から断定の助動詞を抜き出し、活用形を答えよ。

- (1) 三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。
- (2) 国司たりし時、官錢を盗みて、施行す。
- (3) 男、異心ありてかかるにやあらむと思ひ疑ひて、

(3)	(1)
_____	_____
.	.
形	形
	(2)
	_____
	.
	形

**7** 次の傍線部の「に」を文法的に説明せよ。

- (1) 一夜のうちに塵灰となり<sup>に</sup>き。
- (2) おのが身はこの国の人にもあらず、

_____	_____
.	.
形	形

**5** 助動詞は、接続（上にある語から判断）

と活用形（その語の形や下に付いている語から判断）の両方を確認して抜き出している語

く。  
完了・強意の助動詞「つ」「ぬ」と完了・存続の助動詞「たり」は連用形接続、完了・存続の助動詞「り」は四段動詞の已然形・サ変動詞の未然形（サ変・四段の命令形）に接続する。

**6** 断定の助動詞は「なり」「たり」。それぞれ接続している上の語を確認する。「たり」

は完了の「たり」もあるので注意する。

**7** 「に」を識別する。完了の助動詞「ぬ」

の連用形か、断定の助動詞「なり」の連用形かは、接続している上の語で判断する。

1 次の傍線部の語の文法的説明として最も適切なものを、後のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を何度用いてもよい。

- (1) 題出だして、女房にも歌よませたまふ。
- (2) ささぎさきも申さむと思ひしかども、
- (3) 別れ惜しみて、かしの漢詩作りなどしける。
- (4) 富士の山は……わが生ひいでし国にては、西面に見えし山なり。
- (5) 人はいさ心も知らずふる里は花ぞ昔の香に匂ひける
- (6) 男こそいとほしけれ。
- (7) 桜の散りはべりけるを見て詠めり。

- ア 過去の助動詞      イ 詠嘆の助動詞      ウ 形容詞の一部  
 エ サ行四段動詞の一部      オ サ変動詞

- |     |       |     |       |
|-----|-------|-----|-------|
| (1) | _____ | (2) | _____ |
| (2) | _____ | (3) | _____ |
| (3) | _____ | (4) | _____ |
| (4) | _____ | (5) | _____ |
| (5) | _____ | (6) | _____ |
| (6) | _____ | (7) | _____ |

2 次の( ) に助動詞「ず」を適切な形に活用させて記せ。

- (1) 京には見え(a) 鳥なれば、みな人見知ら(b)。
- (2) 「げに、ただ人にはあら( ) けり」とおぼして、
- (3) いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあら( ) ば、

- |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|
| (1)   | a     | _____ | _____ |
| (2)   | _____ | _____ | _____ |
| (3)   | b     | _____ | _____ |
| _____ | _____ | _____ | _____ |

現代語訳

1 (1) 歌の題を出して、女房たちにも歌を詠ませなざる。

- (2) 前々から申し上げようと思っていたけれども、
- (3) 別れを惜しんで、あそこの(国の歌である)漢詩を作ったりなどしたそうだ。
- (4) 富士の山は……私が成長した国では、西の方向に見えた山である。
- (5) 人の心はさあどうだかわからない。昔よく行った所では、梅の花は昔のまま香っていることだなあ。
- (6) 男はとても気の毒である。
- (7) 桜が散りましたのを見て詠んだ。

2 (1) 京には見えない鳥なので、皆(その名を)知らない。

- (2) 「まことに、普通の人ではなかったよ」とお思いになって、
- (3) 気がかりだったが、自分の従者を行かせるわけにはいかないので、

③ 次の(1)・(2)の( )には完了の助動詞「つ」、(3)には「ぬ」、(4)・(6)には「たり」または「り」を、それぞれ適切な形に活用させて記せ。

- (1) 帝御覧じて、みそかに召し( )けり。  
 (2) いとねぶたし。昨夜もすすろに起き明かし( )き。  
 (3) その人の名忘れ( )けり。  
 (4) このもとの女、悪しと思へ( )気色もなし。  
 (5) おもしろく咲き( )花を長く折る。  
 (6) 撫子にぞいとよく似( )。

(1) \_\_\_\_\_  
 (2) \_\_\_\_\_  
 (3) \_\_\_\_\_  
 (4) \_\_\_\_\_  
 (5) \_\_\_\_\_  
 (6) \_\_\_\_\_

④ 次の傍線部の助動詞の文法的意味と、ここでの活用形を答えよ。

- (1) 「壺なる御薬たてまつれ」  
 (2) 清盛公いまだ安芸守たりし時、

(1) \_\_\_\_\_  
 (2) \_\_\_\_\_

⑤ 次の傍線部の助動詞の文法的意味と、ここでの活用形を答えよ。

- (1) 風波やまねば、なほ同じ所にとまれり。  
 (2) はや船出して、この浦を去りぬ。  
 (3) 開けて出で入る所閉てぬ人、いとにくし。  
 (4) 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる  
 (5) 雨のいたく降りしかば、え参らずなりにき。  
 (6) 「古今集」の序に書かれたるは、これらの類にや侍らん。

(1) \_\_\_\_\_  
 (2) \_\_\_\_\_  
 (3) \_\_\_\_\_  
 (4) \_\_\_\_\_  
 (5) \_\_\_\_\_  
 (6) \_\_\_\_\_

③ (1)帝が御覧になって、こっそりとお呼びになった。

- (2)とても眠い。昨夜も何ということもなく起き明かした。  
 (3)その人の名前を忘れてしまった。  
 (4)この以前からの女は、ひどいと思っっている様子もない。  
 (5)趣深く咲いている花を長めに折る。  
 (6)撫子にとてもよく似ている。

④ (1)「壺にあるお薬を召し上げれ」

- (2)清盛公がまだ安芸守であったとき、

⑤ (1)風や波がやまないの、やはり同じ場所にとどまっている。

- (2)すぐに船を出して、この海岸から去ってしまいなさい。  
 (3)開けて出入りする所を閉めない人は、たいそう気に入らない。  
 (4)秋が来たと目にははつきりと見えないが、風の音ではつと気がつくことだ。  
 (5)雨がたいそう激しく降ったので、参上できなくなりました。  
 (6)「古今集」の序に書かれてるのは、これらの類でしょうか。

① 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

月にはかられて、夜深く起きに<sup>①</sup>けるも、思ふらむところいとほしけれど、たち帰らむも遠きほどなれば、やうやうゆくに、小家などに例おとなふものも聞えず、くまなき月に、ところどころの花の木どもも、ひとへにまがひぬべく<sup>②</sup>A たり。いま少し、過ぎて見 B 所よりも、おもしろく、過ぎがたき心地して、

そなたへと行きもやられず花桜にほふ木蔭に旅だたれつつ

とうち誦じて、「はやく、ここにも言ひ C 人あり」と思ひ出でて、立ちやすらふに、築地のくづれより、白きものの、いたくしはぶきつつ出づめり。あはれげに荒れ、人けなき所なれば、ここかしこのぞけど、とがむる人なし。

問一 傍線部①の助動詞の終止形を含む文を次のA～Eの中から一つ選び、記号で答えよ。

A 犬を蔵人二人して打ち給ひては、死ぬべし。

I 海の底沖漕ぐ舟を辺に寄せむ風も吹かぬか波たたずして

ウ うら悲し春し過ぐればほととぎすいやしき鳴きぬ

E 人離れたる所にぞうちとけて寝ぬる。

問二 傍線部②と同じ文法的意味の助動詞を含む文を次のA～Eの中から一つ選び、記号で答えよ。

A たなばた祭るこそ、なまめかしけれ。

I 木の間より漏り来る月のかげみれば心づくしの秋は来にけり

ウ 今は昔、薬師寺の別当僧都といふ人ありけり。

E 冬枯れのけしきこそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。

問三 [ ] A～Cに、次のそれぞれの語を活用させて入れよ。

A かすむ

B つ

C き

出典  
「堤中納言物語」

平安時代後期の成立、短編物語集。「花桜折る少将・このついで・虫めづる姫君・ほどの懸想・逢坂越えぬ権中納言・貝合はせ・思はぬ方にとまりする少将・はなだの女御・はいずみ・よしなしごと」の十編の短編物語と一編の断章が収められている。

重要古語

- ◇ はかられて Ⅱ だまされて。
- ◇ いとほしけれど Ⅱ 気の毒ではあるけれど。
- ◇ 例 Ⅱ ふだん。
- ◇ おとなふ Ⅱ 音がする。
- ◇ くまなき Ⅱ 曇りのない。
- ◇ まがひぬべく Ⅱ 見間違えてしまいそうに。
- ◇ しはぶきつつ出づめり Ⅱ 咳をしながら出て来るようだ。

語彙

問一 本文の「に」は助動詞の連用形。助動詞は上の語との接続から判断する。

問二 本文の「けり」は過去の助動詞。接続をしつかり見抜くこと。

問三 活用のある語の語形は、下に付いている語によって決まる。B・Cの助動詞は接続に注意する。

② 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

ここに六十の露消えがたに及びて、さらに末葉の宿りを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿りを作り、老いたる蚕の繭を営むがごとし。これを中ごろの栖に比ぶれば、また百分が一に及ばず。とかくいふほどに、<sup>②</sup> 齢は歳々に高く、<sup>①</sup> 栖は折々に狭し。その家のありさま世の常にも似ず。広さはわづかに方丈、高さは七尺が<sup>③</sup> うちなり。所を思ひ定めざるがゆゑに、<sup>④</sup> 地を占めて造らず。土居を組み、<sup>⑤</sup> 打覆を葺きて、<sup>⑥</sup> 継ぎ目ごとに掛金を掛けたり。もし心になはぬことあらば、やすくほかへ移さんがためなり。その改め作ること、いくばくの煩ひかある。積むところわづかに二両、車の力を報ふほかには、さらに他の用途いらず。

(注) ○中ごろの栖 || 筆者が三十歳まで住んだ家。

○用途 || 費用。

問一 傍線部①と文法的に同じ「る」を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 男女死ぬる者数十人、馬・牛のたぐひ返際を知らず。
- イ わづらはしかりつる事はことなくて、やすかるべき事はいと心ぐるし。
- ウ 世を治むる道、儉約を本とす。
- エ 人をやりて見するに、おほかた、逢へる者なし。

問二 傍線部②～⑤の助動詞を文法的に説明せよ。

②      ③      ④      ⑤

問三 傍線部⑥を、何を移すのかを明確にして現代語訳せよ。「ん〈む〉」 || 意志の助動詞

②

出典

「方丈記」

鎌倉時代初め成立の随筆。筆者は鴨長明。前半は、遭遇した天変地異を通して無常の境地を述べ、後半は、京の郊外日野山に結んだ庵について心境を記している。

重要古語

- ◇末葉の宿り || 晩年の住居。
- ◇老いたる蚕の繭 || 人生最後の住居の比喩。
- ◇ごとし || のようだ。
- ◇世の常 || 世間並み。
- ◇方丈 || 一丈四方。書名の由来。
- ◇いくばくの煩ひかある || どれほどの面倒があるうか(いや、ない)。
- ◇車の力を報ふ || 運搬する車に対し報酬を払う。

TUN

- 問一 語の一部なのか、一つの単語なのか見分け、助動詞は接続を確認する。
- 問二 上の語の活用形を確認し判断する。②と⑤は文脈から意味を判断する。
- 問三 この文章は、どのようなことについて述べているのか。